

●取材を終えて

橋本務さんにインタビューした帰り、ときどんの池に寄ってみると、そこでグラウンドゴルフ場の芝を刈る人に会った。話を聞くと、誰かに頼まれて作業しているわけではないらしい。

「わたしは、いつもここでグラウンドゴルフを楽しんでいます。だから、自分できれいにするのは当たり前のこと。毎日の仕事に一生懸命励むことができるのも、ここに早く来たいと思うから。ここに愛着があるから、自分にできることで貢献しようって思うんです」と話す、その人の笑顔が印象的だった。

この公園の誕生から9年が過ぎた今も、美しい景観をずっと保ち続けていられるのは、そんな人たちの日々の努力があることを忘れてはならない。

住民が憩う場所をつくりたいと願い、地域を動かした橋本務さん。今では地区内外からたくさんの人が集う、みんなに親しまれる公園に成長した。ここに至るまでには数々の課題もあったと、あるとき務さんは言った。しかし、この土地に愛着があったから困難も乗り越切れた。地域の団結があったからやり遂げることができたとも話していた。

近年、まちづくりの重要性が叫ばれて久しいが、どうもその本質を見失ってはいないだろうか。「どんなまちづくりをすべきか？」ばかりが議論の先に立ち、本来の目的である「なぜ、まちづくりをするのか？」という部分が置いてけぼりになっているような気がしてならない。

「この地が好きだから。ずっと住んでいたいから。だからこそ、自分たちでやれることをやりたい」。徳山区に見るそんな単純な思いこそが、まちづくりの基本であり原点なんだろうと思う。

少子高齢・過疎化が進む現代。この徳山区も例外ではない。伝統芸能「鹿ノ舞・ヒーヤイ」の舞い手が近年、中学生から小学生に変更されたのも、少子化が色濃く影響している。

町を離れる若者が増えた今、何より怖いのは、住民が地域への愛着を失ってしまうこと。地域に誇りを、未来に夢を持ってなくなってしまうことだ。

今回の取材では、地域の夢を、地域の未来を、生き生きと語る人がたくさんいた。自分にできることを頑張ろうとする人がたくさんいた。そんな人たちの思いと知恵と努力が、この公園の歴史をつくり上げてきた。

自分たちが暮らす地域だから、自分たちの手でつくり上げる。自分たちがつくった場所だから、さらに愛着も沸く。何度も何度も足を運びたい。維持管理にだって精を出すことができる。そんな好循環が「地域」を、「町」を、生き生きと輝かせていくのだろう。

一步踏み出そうとする勇気。何かをやってみようとする意思。わたしたちが忘れてはならない「地域を愛する心」を、徳山区の取り組みは教えてくれていた。

「ときどんの池はすてきな公園になりましたね」。そう声をかけたわたしに、務さんはにっこりとうなずいて見せた。

その笑顔は、地域への愛着心にあふれていた。

特集 地域への愛着心 終

再生から育成へ
育成から創造へ
地域への愛着心が、
地域を生き生きと輝かせる

週末、ときどんの池に写真を撮りに行くと、そこで島田市川根町から来ていた中村さんと一家と出会った。お母さんに話を聞くと、「ここは以前から、子どもを連れてよく来ます。子どもを遊ばせるには最適な場所。子どもたちも楽しみにしているんですよ」と話していた。竜斗くん（7歳）と郁哉くん（5歳）は、お母さんと一緒に池の鯉を見て楽しんだ後、周辺でザリガニを捕まえて大喜び。2人とも「10匹とろぞ！」と意気込んでいた。町外からも多くの人を訪れるときどんの池。「交流」という新たな方向性を示す、まちづくりの一つの形だ。